

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 53

June, 2018

関西大学ニュースレター

発行日：2018年(平成30年)6月13日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>

RIE
NAKATA
MUKATA

■対談 中村利江 夢の街創造委員会株式会社代表取締役社長／芝井敬司 学長
大学から社会を革新するベンチャーを
「挑み続ける生き方」
●起業者精神をいかに育むか

■リーダーズ・ナウ ー5

在学生ー 社会学部 3年次生 宮西 美紅 さん
卒業生ー 茶道家 ハーブレヒツ・ティアス 宗笈 さん

■研究最前線

臨床心理士の在り方を研究
困難を抱えた子ども、若者、家庭を
地域で支援する ー7

心理学研究科(臨床心理専門職大学院)ー 石田 陽彦 教授

生体に倣うマテリアルデザイン
身体に優しいマテリアルの開発 ー9

化学生命工学部 ー 岩崎 泰彦 教授

■トピックス【学内情報】 ー11

「豊かで持続的な集住環境への再編に向けた技術の普及啓発」が評価
江川直樹教授が文部科学省大臣表彰を受賞 ほか

■社会貢献・連携事業 ー13

社会安全学部がラジオ放送をスタート
ラジオ番組で防災・減災のノウハウを社会へ発信！ ほか

■関大ニュース ー15

環境都市工学部土木系学科創設50周年・
都市システム工学科創設10周年記念式典を開催 ほか

■対談

●起業家精神をいかに育むか

挑み続ける生き方

大学から社会を革新するベンチャーを



中村 利江 ・夢の街創造委員会株式会社 代表取締役社長

芝井 敬司 ・学長

ビザ、弁当、中華などの料理から酒や各種サービスまで、幅広いジャンルの店舗に待ち時間を確認しながら出前を注文できる、便利なデリバリー総合サイト「出前館」。運営するのは、夢の街創造委員会株式会社。

その代表取締役社長を務め、同社をデリバリー業界のリーディングカンパニーに育て上げた中村利江氏が、芝井敬司学長と新ビジネスの創出や人材開発、大学の役割について語り合った。

Keep Trying

◆ベンチャー人生の出発点は、大学1年次生

芝井 富山県高岡市のご出身ですね。私自身はずっと大阪市内ですが、高岡市から少し南にある福野に祖父の生家があって、小さい頃に訪れたのを覚えています。祖父に言わせると、富山の人は粘り強いけれど少し生真面目過ぎると。

中村 そうですね。よく働くものの、チャレンジすることが少ないということで、私は県からのご依頼で起業についての講演を何度かさせていただいています。

芝井 祖父はまた、「人に使われるほどつまらないことはない。どんな形であれ、自分が主体的に取り組まないと、人生は楽しくない」ともよく言っていました。中村さんもそういうところがあるのでは？

中村 学生のころから商売の仕組みにとっても興味がありましたね。学食に行っても原価率や廃棄ロスが気になって、食堂の人に尋ねたりしていました。そして、「何か自分でやりたい。自分が動くことで人に喜んでいただけることがしたい」という気持ちもずっとありました。それで、関西大学1年次のときに始めたのが、女子大生がモーニングコールをかけるというビジネスでした。



大学1年次の中村さん

芝井 早起きしたい人を起こすという日常的な世界をビジネスにするという発想は、普通の人にはなかったでしょうね。そのような感覚を共有できる友達は当時おられましたか？

中村 あまりいなかったですね。ただ、モーニングコールビジネスはみんな応援してくれました。大学時代の友達とは、いまだに年に何回も会って交流が続いています。

芝井 大学時代の交流は一生の財産になります。一度しかない人生ですから、学生の間は多くの人と出会い、ぜひ幅広くものを見てしっかり生きてほしい。また、せっかく商都大阪に大学があるわけですし、自分のアイデアを形にすることに積極的になってほしい。それを私たちも支援したいと思っています。

◆チャレンジする学生を、関大は応援する

芝井 関西大学は創立130周年を迎えた2016年、ベンチャー育成につながるさまざまな試みを行うイノベーション創生センターを設立しました。学生や教員が企業・研究機関と交流できる文理融合型の施設で、スタートアップやベンチャー支援のための行事も定期的実施しています。また、梅田キャンパスを開設し、スタートアップの相談窓口を設けました。この窓口は利用する方が非常に多く、相談件数は1,450を超え、35社の起業につながりました。特に最近、学生の間ではソーシャルビジネスへの関心が高まっていて、アイデアを形にする上でのドライブとしても大きな役割を果たしています。

中村 こういう施設や窓口があるとうれいそうですね。私が学生のころは、こういう場を作ってほしいとか、資金があればいろいろできるのにと何度も感じていました。

芝井 やはりそうですか。実は起業する時の資金的な面での支えとなる機能も大学が持つべきだと考え、ベンチャー育成の仕組み

を作る予定です。単なるお金の問題ではなく、場合によっては学生の人生にもかかわることでもありますので、慎重に取り組んでいきたいと思っています。

中村 そういう試みは、ぜひ応援させてください。

芝井 商学部が行っているKUBIC(関西大学ビジネスプランコンペティション)についても、長年ご協力いただきありがとうございます。KUBICは全国の大学生や高校生がビジネスプランを競い合うもの。長い間かかわってこられた印象はいかがでしょうか。

中村 まず、こういうコンテストを大学に用意していただけるということは、何かしたいと思っている学生にとって大変ありがたいことだと思います。

審査を通して感じたのは、昔は図書館に向き、カタログ等の資料も全部足で集めて企画書を作ったものですが、今はほとんどネットで簡単に情報が収集できる時代になったこと。その結果、深読みができていない学生が増えてしまっているような気がしました。

もちろんアンケートをちゃんと取り、足で情報を集め、しっかり自分で考えた良い提案をしてくれる学生もいました。また、最近の学生はプレゼンテーション能力が高くなっていますね。その点はすごく良いと思いました。

芝井 大学では、具体的なテーマの課題解決に学生が主体的に取り組むPBL(Project-Based Learning)型授業も増えています。これからの大学は実社会に向き合って教育を考えていかなければなりません。企業の方々には、今後もさまざまな課題を大学に持ち込んでいただき、学生がその問題解決と格闘できるよう協力いただければと思います。

◆現場に入って課題を発見することが、ビジネスの第一歩

芝井 中村さんは、卒業後リクルートに就職され、ほっかほっか亭を運営するハークスレイにお勤めになり、そこで夢の街創造委員会と接点を持たれました。夢の街創造委員会の社長に就任されてから、出前館の事業を立て直される中で、ネットでの注文の取り次ぎ方法を変えられたそうですね。ファックスで伝えた後、確認の電話を入れるシステムが加盟店の増加につながったという点が、大変面白いと思いました。

中村 先代の社長の時には、小型パソコンを加盟店に配っていました。また、競合他社も同じように、パソコンを無料であちこちに配っていましたね。でも、私は「なんか違うんじゃないか」と思っていました。飲食店の現場は忙しく、油も熱もあるわけ、パソコンなんて開きませんから。当初、ファックスと電話の取り



■対談



芝井 敬司 (しばい けいじ)
1956年大阪府生まれ。78年京都大学文学部史学科(西洋史)卒業。81年京都大学大学院文学研究科博士課程後期課程中途退学。84年関西大学に着任し、専任講師、助教授を経て、94年文学部教授。文学部長、副学長を歴任し、2016年10月に学長に就任。一般社団法人日本私立大学連盟常務理事、公益財団法人大学基準協会理事、文部科学省大学設置・学校法人審議会特別委員。

大学では、具体的なテーマの課題解決に学生が主体的に取り組むPBL型授業も増えています。これからの大学は実社会に向き合って教育を考えていかねばなりません。

次ぎは周囲に反対されましたが、自分でやってみて小さな成功事例を積み上げ、皆を説得しました。

芝井 新しいアイデアを考える時、人は先の社会の在り方を想定し、そこに追いつくような形でのシステムが必要だと思込んでしまいがちです。でも、それが普及の足かせになってしまうこともあります。少し古いやり方のように思えても、皆が安定して使えるようなシステムにうまく乗せることで、むしろ普及につながっていくことがあるのでしょう。中村さんは現場をしっかりとご覧になっていたから、そこに気づかれたのですね。

中村 現場に出るとさまざまな課題が見つかります。その課題を解決することがビジネスに発展します。つまり、課題の発見こそがビジネスの第一歩だと思います。

◆時代は変わる。日本も、大学も、新しい挑戦を

芝井 中村さんはまさにずっとチャレンジしてこられたわけですが、日本の社会は「挑戦」に対して、好意的でしょうか。

中村 日本は保守的な方も多く、今は不満がないからと問題を先送りにしがちです。しかし、「今はいいですが、5年後に通用しません。それでもいいのですか」としっかりと考えなければなりません。私たちの会社での人事評価ポイントは、「何か新しいものを生み出したか」「何かを変えたか」のどちらかで、同じことをしている人は必要ありません。採用面接の段階から「当社は成長するベンチャーです。社員も成長を求められます。成長をしたくないと思っているなら、安定している会社を選ばれた方がいいですよ」とはっきり申し上げています。

アメリカはもとよりアジア諸国と比べても、日本はベンチャーのようなチャレンジを後押ししようという雰囲気が社会に定着していません。本当に新しい発想でビジネスをもっと起こしていけないと、日本は取り残されて世界の中で貧しい国になりかねません。

芝井 大学の話をしますと、18歳人口はどんどん減って、市場が小さくなるのは決まっています。アメリカも大学の半数がつぶれると言われた時期がありました。ほとんど大丈夫でした。解決のカギは留学生、社会人の学び直し(リカレント教育)、シニア市場です。また、この3つすべてとかわかりませんが、パートタイマーの学生を科目等履修生という形で大学に取り込むこと。この4つの戦略をとった大学が危機を乗り切ったわけです。

現在の日本も同じ状況で、大学が何かをしななければいけないのですが、どこの大学もいわゆる若者を相手にどういう形で我慢できるかという争いをしているところがあります。

中村 学び直しにはとても興味があります。社会人になってもインプットしておかないと、アウトプットできませんので。私自身も英語や心理学など、もう一度しっかり学びたいと思っています。

芝井 社会人の学び直しは、すでに梅田キャンパスでいくつかのプログラムが動いています。例えば、「海外子会社の経営を担う人材を養成する大学院教育プログラム」では、海外で活躍する経営幹部を育成しています。また、大阪よみうり文化センターとの相互協力のもとに開講した「梅田みらいずカルチャーリンク」では、関西大学の教員による講座を定期的に設けています。東京センターでもさまざまな企画をしており、こうした取り組みの社会

的な認知を高めることも課題です。

中村 せっかくこれだけたくさん卒業生がおられるのですから、卒業生のSNSネットワークを強化されてはどうでしょうか。卒業生にとってメリットのある情報を明確に伝えることができれば、もう一回勉強したいと思っている多くの方に、「刺さる」メッセージになるのではないかと思います。

◆社会のインフラとなる事業を目指して

芝井 いろいろなことがあったでしょうけれど、大きく見ると会社は順調に成長してこられましたね。

中村 まだこれからです。今は第2創業期だと捉え、新しい取り組みを始めています。現在、加入店舗が1万6000店以上、流通金額が500億円規模まで来ました。ここまで来るとビッグデータが蓄積され、活用できるようになります。デリバリーの状況を解析すると、「このエリアには中華が足りない」「ここに天井屋さんがあったら、月の売上はこのくらい」という明確な予測が出るようになりました。

しかしお店にすれば、人手不足の時代に自前で配達を始めるのはリスクが大きい。そこで、ある地域の中で複数の店舗の出前配達を集約して請け負う「シェアリングデリバリー」をすると、成り立つのではと考えました。その取っ掛かりとして、新聞販売店との提携を始めました。開始後1年もたっていませんが、すでに新聞配達の売上よりも出前館の売上の方が多くなった店も出てきています。このように、もともと存在しているモデルを生かした新しいビジネスモデルへの転換ができています。

1つの拠点がカバーする配達エリアは半径2キロまでです。そのエリアで配達網が成り立つようになると、飲食以外にもカバーできます。ドラッグストア、スーパーの商品配達から、介護関連のお手伝いなども考えられます。この半径2キロの地域密着のインフラを、私たちのような小さなベンチャー企業が旗を振って築き、それがこれからの高齢化社会でお役に立っていくかもしれません。

芝井 デリバリーというと、食事を配達するイメージですが、そのシステムは生きるためのインフラのようなところもあり、場合によっては行政サービスの一端を引き受けることもできるということですね。

中村 インフラは一朝一夕で整備できるものではなく、一から時間をかけて着実に積み上げなければインフラビジネスは成り立ちません。今はまだ壮大な夢の途中、やっと2割くらいのところまできたのかなと思っています。ゴールはずっと先の方ですが、一步一步前進することで最終的にインフラを構築できるでしょう。そして、インフラになってしまえばもう誰にもまねできなくなります。

芝井 最後に、耳の痛いことでも結構です。本学に対する注文をお聞かせください。

中村 関西大学にはぜひ、関西ひいては日本を代表する大学として、一段と存在感を示していただきたい。そのためには明確な戦略を打ち出し、日本の先駆けとなられるよう期待しています。

芝井 関西大学はこれからも発展を続け、少子化の波を乗り越えて、名誉ある存在であり続けたいと思います。多くの人に「ああ、いい大学だ」と感じていただけるような大学でありたいのです。どうぞ引き続き、お力添えをよろしくお願いいたします。

現場に出るとさまざまな課題が見つかります。その課題を解決することがビジネスに発展します。つまり、課題の発見こそがビジネスの第一歩だと思います。



中村 利江 (なかむら りえ)
1964年富山県生まれ。88年関西大学文学部卒業。株式会社リクルート、株式会社ハークスレイを経て、2001年夢の街創造委員会株式会社入社。02年代表取締役社長、09年代表取締役会長。カルチャー・コンビニエンス・クラブ株式会社取締役などを経て、12年より現職の代表取締役社長へ復帰。

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

その「瞬間」を伝えたい

現場を奔走するカンスポ編集局員

◎社会学部 3年次生
宮西 美紅 さん

創刊60周年を迎えた『関大スポーツ(カンスポ)』。その編集局には各競技を紹介するため奔走する編集局員がいる。アイススケートを担当し、2018年2月の第23回オリンピック冬季競技大会(平昌五輪)に出場した宮原知子選手(文学部3年次生)を取材した宮西美紅さんも、真剣勝負だからこそ生まれるその「瞬間」を、追い求めている。

宮西 美紅—みやにし みく

■1997年、大阪府生まれ。大阪府立八尾高等学校卒。体育会本部関大スポーツ編集局所属。担当はアイススケート、器械体操、柔道、バスケットボール男子。特技はフィギュアスケートのジャンプの見分け。



●報道陣とともに取材に臨む宮西さん



満開の桜が咲き誇る千里山キャンパス。竣工直後の新しい匂いに包まれた東体育館の一室で、宮西さんは「取材されるのは初めてです。よろしくお願ひします」と緊張した表情を見せた。体育会「KAISERS」の活躍を報じる学生広報機関であるカンスポ編集局員として、主に年6回発行のカンスポと号外の紙面を彩る試合や選手を取材している。試合直後にTwitterで速報をアップし、2日以内にWEB記事を掲載。他の局員同様、宮西さんも複数の競技を担当しているが、特にフィギュアスケートの宮原選手の取材が多いという。

5歳から17歳までクラシック・バレエを習っていた宮西さんは、表現力など共通点の多いフィギュアスケートへの造詣も深い。国内の大会はほぼすべて取材に向かい、競技後の取材エリアでは一般紙、スポーツ紙をはじめ30人以上の報道陣とともに宮原選手を取り囲む。表情を読み取り、コメントの一言一句逃すまいと集中する。「何度か取材しているうちに、インタビューの位置や質問の仕方などの取材術が身につきました。もちろんプロの記者の方にはかなわないでしょうが、選手を応援できるような大学新聞らしい記事を書けるように取り組んでいます。難読な漢字や調べないと意味が分からないような四字熟語は極力避けて、誤解なく読んでいただける記事づくりを心がけています。私の記事がKAISERSの方の目に触れた時に、『頑張ろう!』と思ってもらえたらうれしいですね。」

紙媒体、WEB媒体を問わず自分の署名入りで多くの記事を発信する宮西さんにとって、思い入れの強い記事が2つある。1つはカンスポ第283号(2017年12月11日付)「宮原11か月ぶり氷上復帰」。左股関節の負傷から320日ぶりに銀盤を舞った宮原選手の復活劇を、大会当日とカンスポ発行日のタイムラグを考慮しつつ、平昌五輪出場へ光射す確かな手応えとして書き上げた。そしてもう1つは平昌五輪を現地取材した第284号(2018年4月1日付)「宮原、自分史上最高の演技」。夢舞台で自己ベストを更新し、4位入賞を果たした宮原選手の取材で、現場の雰囲気や技の出来栄を詳細に描き「少しの悔しさと大きな自信を胸に、また一日一日大切に紡いでいく。宮原知子だけのあすをつかむために。」と締めくくった。五輪後の3月8日に学内で開催された「平昌オリンピック凱旋報告会」で宮西さんは、宮原選手のインタビュアーという大役も務めた。



▲宮西さんの記事がトップを飾ったカンスポ第277号(右)、第284号

編集局員として活躍する宮西さんの原動力は高校の恩師との雑談にある。今でも脳裏に焼き付いている「『初めて』が少なくなると時間が早く過ぎる。人生を長く生きたかったら、新しいことに挑戦すること」という恩師の言葉は、第280号(2017年7月3日付)の1面コラムにも記した。「(前略)▼しかし、それでも日常に『初めて』を取り込むことはできるだろう。本を読むこと、知らないアーティストの音楽を聴くこと。カンスポの活動も同じだ。スポーツは一瞬一瞬が新しい出会い。その瞬間を伝えることこそが、カンスポ部員としての使命だと信じている▼長く、豊かな人生を生きる。だから私は、ありふれた今日に真っ白な一歩を踏み出す。【宮西美紅】」キャンパスを舞ったこの日の桜吹雪のように——。予定調和では生まれないその瞬間を、宮西さんは追い求めている。

ベルギー出身茶人が演出する「綺麗さび」の世界

忘我の時を作る茶の湯

◎茶道家
ハーブレヒツ・ティアス 宗笈 さん

Huybrechts Tyas Sosen —大学院文学研究科 2013年修了—



剣術家・宮本武蔵の生き様に触れ、日本文化に惹かれたベルギー人のティアス宗笈さん。京都の町屋を拠点に、茶の湯で訪日外国人をもてなし、厳選した有機栽培の日本茶を販売している。確たる思考と信念のもと、異国の地で、日本文化の普及活動にまい進中だ。



芸妓・舞妓があでやかに舞う京都「五花街」の一つ、宮川町。鴨川の流に寄り添うように続く石畳に面する町屋から、日本の伝統文化を発信する異邦人がいる。見る者を魅了する流麗な所作で茶をたてるベルギー人のティアス宗笈さんは、「宮本武蔵に『日本においてよ』と呼ばれて来たようなものです」と笑った。ダイヤモンド加工を中心に発展してきた故郷アントウェルペンでサムライを知った。剣道場に通い始めた16歳の時に、道場の先生から「剣道の文化を知るためにも読むべきだ」と、『宮本武蔵(吉川英治著)のオランダ語訳を渡された。「1,000ページぐらいありましたが、1カ月かけて読破しました。こんな文化があるのか。こんな信念の貫き方があるのかと、衝撃を受けましたね。当時、社会への反発や固定観念への嫌悪感を感じていたティアス宗笈さんは、「一匹狼」として孤高に生きる宮本武蔵に憧れ、日本行きを決意した。

ベルギー屈指の名門ルーヴェン大学で日本文化や言語を学び、2008年9月、交換留学生として1年間関西大学へ留学。「留学する

までの日本のイメージは、宮本武蔵の生きていた時代そのものでしたね。留学から半年程たった頃、遠州流の教室を開催していたアントニー・スティヴン・ギブス教授から誘いを受け、茶道に触れた。「それまでにも能楽、空手道、杖道、剣道などはしていましたが……。茶道を通じて日本の書、建築、庭造り、陶芸、芸術の伝統文化や古典語などを同時に学ぶことができ感動しました。」



2011年に関西大学大学院文学研究科に入学すると、本格的に日本の近世文学や伝統文化を学んだ。大学院を修了後、日本の文化とは関連のない企業に勤めたが、「何のために日本に来たのか」と自問を重ね、京都・宇治にある老舗の茶舗に転職した。茶の造詣を深め、ベルギー人初の日本茶インストラクターの資格を取得し、さらには外国人として当時最年少の遠州流茶道の師範となった。

江戸時代初期の大名茶人で、総合芸術家として名を馳せた小堀遠州を流祖とする遠州流茶道の神髄は、「綺麗さび」にある。わび・さびの精神に、美しさ、明るさ、豊かさを加え、誰からも美しいと言われる客観美、調和美を創り上げる。「茶道の精神はホスピタリティにあります。初めてお茶席に参加された外国の方から『もう終了ですか? あっという間に時間がたっていました』と言われるとうれしいですね。ティアス宗笈さんは、おもてなしの心で「綺麗さび」を演出し、忘我の時を作っている。



▲「茶ノ実鶴園」ブランドの日本茶や茶道具



▲英語版のパンフレット

現在は日本人女性と結婚し、京都を中心に活動している。「ベルギーを離れる時に『これからはずっと日本にいる気がする』と感じました。ここから日本文化を世界に広めたいですね」とほほ笑んだ。厳選した有機栽培の日本茶「茶ノ実鶴園」ブランドを立ち上げ、ワークショップに加えてティースクールも開講する。「宮本武蔵が生きた当時のライフスタイルに憧れ、昔の人が飲んでいた有機栽培のお茶をたくさんの人に飲んでもらいたいと思いました」と語るティアス宗笈さんは、母国から遠く離れた日本で居場所を見つけ、日本文化を発信し続けていく。

■研究最前線

臨床心理士の在り方を研究

困難を抱えた子ども、若者、家庭を
地域で支援する

切れ目のない自立支援の実現に向けて

●心理学研究科（臨床心理専門職大学院）
石田 陽彦 教授



特別支援教育の組織化をはじめ、発達障害者の社会参加や不登校、青年のひきこもり対策など、自立支援に関する多様な活動に日々奔走してきた石田教授。現在は、「有能で有用な地域支援臨床心理士」の育成に尽力している。内閣府子ども若者・子育て施策推進室調査検討委員としても、困難を抱える子ども達が早い段階で社会復帰できるよう地域支援の組織作りにまい進する。



■不登校の子ども達とその家族を地域が支援

—先生は地域支援臨床心理士として、奈良県葛城市を中心に幅広く活動されています。その背景や内容とは？

奈良県とのかかわりは、1996年に「文部科学省スクールカウンセラー（SC）活用調査研究事業」のSCとして、中学校へ登用されたことが始まりです。2年限定の勤務でしたが、町長から町のSCとして残ってほしいとの申し出があり、喜んで了承しました。そこから地域の不登校児童の全戸家庭訪問を行い、実態を把握したうえで、99年に全国初となる町立適応指導教室を開設しました。

この適応指導教室は、子ども達に何かを強制したり、子ども達が嫌がることを無理にさせたりせず、本当に好きなことをし、そこから意欲を持って生活できるよう導くという点で、一般的な指導教室とは大きく異なるものとなりました。また、保健センターなどと連携したことも特徴の一つ。というのも実は教育委員会には子ども達の生活背景に関する情報がわずかしくなく、手掛かりの多くは保健センター等にあるためです。例えば、怠けていると思われていたとある不登校の中学生の話ですが、保健センターの情報を開示してみると、3歳から歯が無かったことが分かりました。つまり、幼少期から養育放棄されていたのです。このように、不登校の背景に潜む家庭問題を察知することで、根深い部分からケアすることが可能になりました。

—地域でかかわり、支援する意義とは？

医師による治療とは違い、臨床心理士はその人の成長発達を支援し、社会へ戻れるようにすることが仕事です。この町の適応指導教室では、子どもを関連機関などに任せきりにする名ばかりの連携ではなく、関連機関で対応しても、必ず地域の学校や適応指導教室が抱え直し、地域で育てあげる体制（リーチング・アウト・イン）をとっています。一般的な教育委員会による支援は中学校まで、問題を抱えた子ども達は卒業すると行き場を失います。しかし、適応指導教室を出た子どもは、開設以来ほぼ全員が進学。ひきこもりはゼロです。それが地域でかかわる意義と言えるでしょう。

—それらの取り組みが、2010年に施行された「子ども・若者育成支援推進法」の流れと合致し、内閣府に注目されたのですね。

当時、35歳までの若者達の不登校やひきこもりの総数は、全国で80万人に達すると言われていました。私達は奈良県や葛城市のひきこもり調査を行い、不登校やひきこもりの中には多くの発達障害と呼ばれる人達がいる事実を確認しました。そこで、彼らのレジリエンス（心の回復力）を高めることを重視したキャンプの実施等を開始したところ、それを後押しするように、内閣府が「子ども・若者育成支援推進法」を施行したのです。これは、困難を抱えた子どもや若者を、子育てから社会復帰まで一貫して地域が支援しようという法律です。葛城市は奈良県初のモデル地区となり、それを関西大学が支援。学内の社会的信頼システム創生センターと協働して、子ども・若者支援ネットワーク形成のための研修会を開催したことは、全国初の試みとして高く評価されました。

■発達障害の子ども達を安心して育てられる町作り

—一方で、先生は発達障害の子ども達を対象とする特別支援教育にも携わられています。活動の経緯をお聞かせください。

発達障害は正しい診断が難しい。そのため、私達は診断を不要とし、ニューロダイバーシティ（脳の多様性）、個性の問題としてかかわっています。

「特別支援教育法」が施行されたのは07年ですが、私達はそれに先駆ける形で、04年から葛城市教育委員会、児童福祉課と協働して幼稚園や保育施設、小学校への巡回相談を開始しました。また、文部科学省の研究事業で国立曽爾青少年自然の家で軽度発達障害児への野外キャンプを実施。保健センターと協働し、就園前療育も始めました。それらの活動が広まったことや中学生までの



医療費免除等の利点から、葛城市は子育ての町として知られるようになり、今も子育て世代の人口が増え続けています。



◀沢登りにチャレンジ

▲竹工作のワークショップ
◀お餅つき体験

—野外キャンプとはどのような内容なのでしょう？

沢登りなどの冒険的な活動を通し、達成感を積み重ねながら、子ども達の社会性や自己肯定感、レジリエンスを養います。沢登りをすると、水は降ってくるし足元は気持ち悪いので、子ども達は最初、とても嫌がります。発達障害の子はバランス感覚が不安定で、岩の苔で転びそうにもなる。すると、自然に横にいる人の腕をつかみ、他人の必要性を理解する。手を取ってもらい進むうちに「僕だってできるもん」と自ら楽しむようになってくる。だめな子、出来ない子と言われ続け疲弊していた子ども達は、どんどん変化していきます。

一方で保護者には、一般的な訓練キャンプのように、子どもの扱い方を指導するという事はしません。子ども達の面倒のほとんどを学生が見ますから、とにかくリフレッシュしてくださいというスタンスです。親も相当疲弊しており、「この子が生まれてから、初めてゆっくりご飯を食べられる」とおっしゃる方や、何も出来ないと思っていた我が子の一生懸命な様子を見て「私もまた明日から頑張ります」という言葉が出る方もいらっしゃいます。

■子育て世代を包括支援するセンターを設立

—現在、先生が統括カウンセラーを務める葛城市のこども・若者サポートセンターとは？

子育てや教育、不登校などの相談窓口を一元化し、臨床心理士や保健師などの専門職員が常駐して相談に応じるセンターで、16年に開設しました。これにより、関係部署や医療機関等との連携がスムーズに。利用者は相談先を迷うことがなくなり、年代が変わっても切れ目のない相談が可能になりました。また、心理職のスタッフがすべての幼稚園や小学校を巡回。子ども達をじっくり観察して教員との指導を進めています。関西大学の学生も実習で入っていますよ。—関西大学は、11年に葛城市との連携協定を締結していますね。

はい。それ以来、前述のキャンプをはじめ、新生児全戸訪問調査への同行や養育相談等の実習など、さまざまな活動に学生が参加しています。ありがたいことに関西大学の学生が一生懸命に取り組む姿が評価され、葛城市だけでなく大阪市や豊中市など多くの市町村から要請があります。学生にとっては社会に出る前の良い訓練であり、学生と連携先の双方が成長していると感じますね。

—現在も多岐に渡って活躍されていますが、今後の展望は？

7年前から携わっている奈良県下北山村の自殺対策事業を進めます。下北山村は人口900人ほど。高等学校はなく、中学校を卒業して村を下り進学すると、そのまま社会へ出て行きます。以前は村に戻ってきた人が自殺することがあったのですが、今は自殺を防ぐため、小学生の間に心の中に「ふるさと」を作る活動をしています。親は皆仕事を持ち、夏休みになると子ども達は生活が乱れる。そこで、寺子屋教室を開きます。子どもだけでは入れない川で思い切り遊び、寺子屋教室主催の夏祭りでは自作の神輿を担いで練り歩く。さらに夜には星空の下で映画を楽しみます。子ども達はどんどん村が好きになります。そうすることで、自分には帰れる場所があると思えるようになるのです。大事なのは心を生かすこと。その活動に注力します。



▲下北山村の「寺子屋教室」
◀自作の神輿を担ぐ地元の子どもたち

また、近い将来、内閣府をはじめ他大学とも協力し、若い人材を育成するトレーニングシステムも構築したいと考えています。大人は合理的で効果のありそうな説明や、早く解決しそうな方法を選びがちですが、それを子どもにあてはめても仕方ありません。大切なのは「かかわりながら待つ」こと。ほとんどご飯を食べない子どもも、せかすから食べられなかっただけで、こちらが待っていればちゃんと食べます。そうしたことも学べる場にしたいですね。



①② 10年前までレースに参戦していた石田教授
③ 鈴鹿サーキットのライセンスカード

研究最前線

生体に倣うマテリアルデザイン

身体に優しい
マテリアルの開発

化学の力で疾患に挑む！

◎化学生命工学部
岩崎 泰彦 教授

KU-SMART PROJECT
のメンバーである岩崎泰彦
教授は、大学時の卒業研究

以来20年余にわたって、生体になじむポリマーの開発に取り組んできた。細胞膜表面の構造を模倣した血液凝固を起こさないポリマーの開発から、最近では生きている細胞の表面を改変し、その機能を操作する新たな挑戦まで、研究の歩を進めている。



生体の中にあるものをまねて、ポリマーを合成

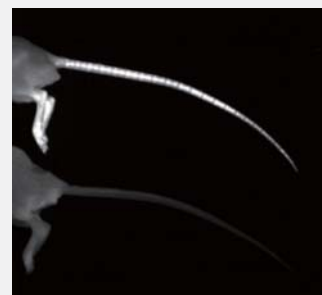
—ご専門は生体材料とお聞きしていますが、「生体材料」とは何でしょう？

古典的には医療機器に用いられる人工の材料と定義されています。今日では人工物に限らず、生体分子や細胞などを組み込んだ材料設計が進められ、目的も医療機器に加え、薬物輸送、診断、計測、分析に至るまで生体(成分)と触れて用いられるあらゆる材料として認識されています。その中で私たちは、生体と接触したときに異物と認識されないように、我々の体内で認められる分子をまねて、身体になじむ材料をつくることに取り組んできました。

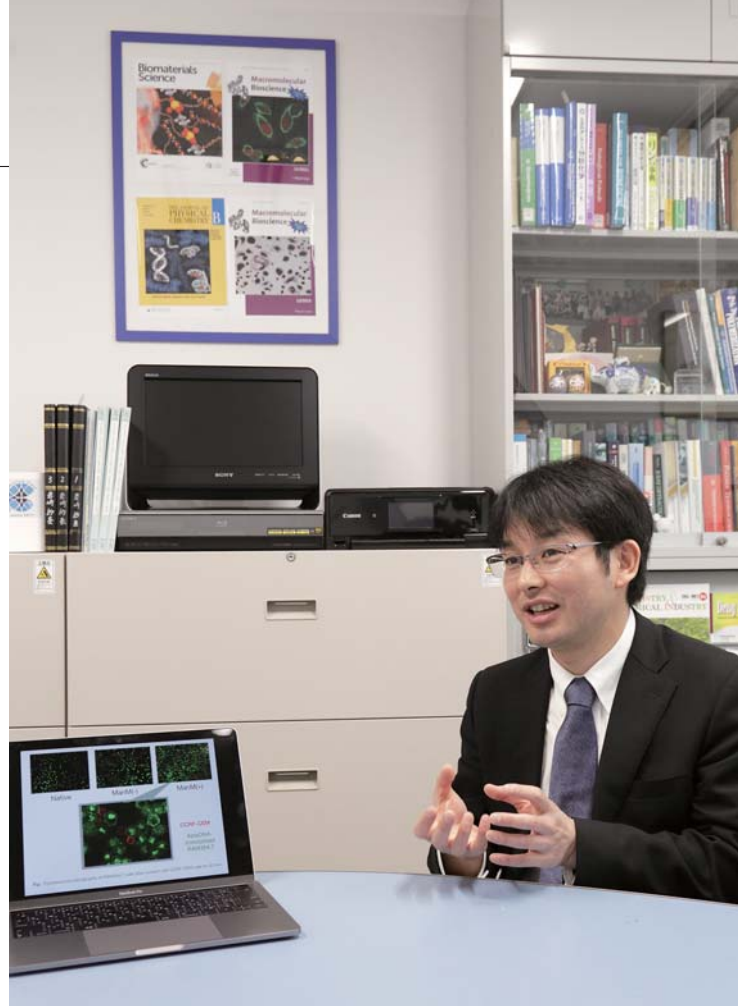
—具体的に、どんな生体材料を作って来られたのですか？

一つは、血液と接触して、凝固反応を誘起しないポリマーを作っています。このポリマーは、人工の血管、心臓、肺などの循環器系医療機器の表面改質に応用できます。血液は異物と触れると、固まる性質があります。つまり、もともと生体に存在しない人工の材料に触れると血液は固まってしまいます。今の医療では、それを防止するため、血液が固まらないように患者に薬を投与するなどの方法をとっています。しかし、血液が固まらない素材が作れたら、投薬量の軽減にとどまらず医療機器の安全性も高まると考えられます。健全

◎骨吸着性ポリマー



蛍光修飾ポリマーが骨に吸着している様子
(上): 蛍光物質を複合化したポリマー
(下): 蛍光物質のみ
(骨への集積が見られない)



な血管の中では、血液は固まりません。そこで、血管の内側にある細胞の表面に着目しました。

細胞の表面は、タンパク質と糖鎖とリン脂質から構成されています。そのリン脂質の構造をまねて合成したポリマーが、2-メタクリロイルオキシエチルホスホリルコリン(MPC)ポリマーです。材料表面で起こる凝固反応は、血中のタンパク質が表面に吸着することから始まります。しかし、MPCポリマーを塗った表面にはタンパク質が吸着しなくなり、凝固反応が進みません。MPCポリマーは、それ自体で人工血管のようなチューブをつくることも、血液と接触する医療機器の内側をコーティングすることもできます。

もう一つ、核酸と同様の構造を持ち、生体内で分解しても毒性が出ないポリリン酸エステルポリマーの合成に成功しました。このポリマーは、骨の主成分であるアパタイトに対し高い親和性を示すので、骨の疾患の治療に活用することができるのではないかと、研究を進めています。例えば、骨粗しょう症。健康な骨は、古い骨が吸収され、新しい骨が作られるリモデリングによって維持されています。しかし、骨粗しょう症になると、骨を溶かす破骨細胞が活性化し、骨を作る骨芽細胞の働きが追いつかなくなり、骨密度が低下してしまいます。ポリリン酸エステルポリマーを投与することで、この破骨細胞と骨芽細胞の活性のバランスを上手く調節することが期待できます。今、大阪医科大学との共同研究の中で、その効果を検証しているところです。

■生細胞の表面を修飾し、がん治療へ展開

前述では、生体分子の構造と機能に着目した材料設計に関する研究に触れましたが、生きている細胞を材料と捉えて、その表面を化学的に操作し、新たな機能が付与された細胞の難治性疾患治療における有用性を見出す研究にも取り組んでいます。

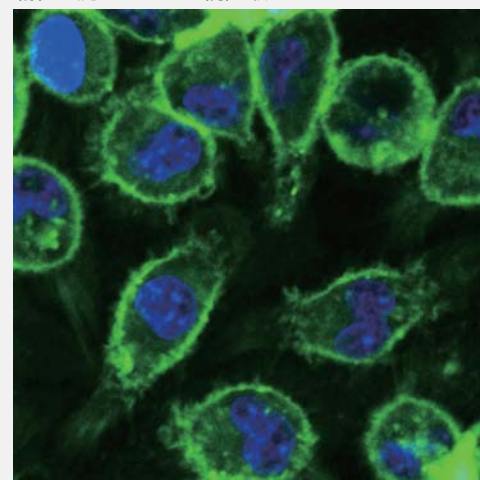
具体的には、白血球の一種、マクロファージの表面改質を行い、がんの免疫治療に展開しようというものです。

Research Front Line



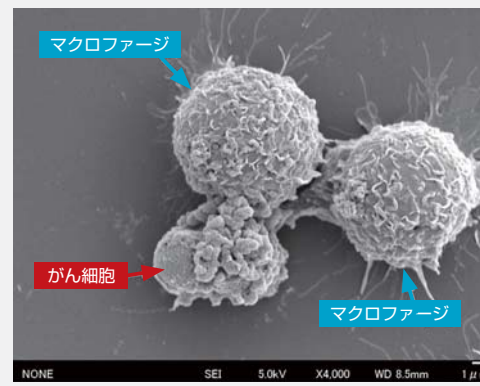
◎アプタマー修飾マクロファージ

蛍光アプタマーを修飾したマクロファージの蛍光顕微鏡写真
(緑): 蛍光アプタマー (青): 核



◎マクロファージとがん細胞

表面にアプタマーを修飾したマクロファージが
がん細胞を貪食する様子



マクロファージは、体の中に入ってきた異物や、死んだ細胞を食べて消化し、体内で清掃屋の役割を果たす細胞です。この細胞の表面に、がんの細胞表面に高発現しているタンパク質と結合する核酸アプタマーを修飾しました。

元来生体には、免疫機能が働いてがん細胞が排除される仕組みが備わっています。しかし、免疫を回避するがん細胞が出現すると、がん細胞を排除する仕組みが破綻し、がんが発症すると言われています。マクロファージの表面を改変することによって、がん細胞との親和性を高め、より多くのがん細胞を捕捉させること

が可能になると期待されます。さらに、マクロファージに修飾するアプタマーの構造を変えることで、この技術が種類の異なるがん細胞や他の病原物質の排除に応用できると考えています。

生体内で生じる疾患の機構はとて複雑で、人工の材料だけでは十分に対処できないものも数多くあります。細胞資源が充実し、細胞医療製品の開発も盛んになってきている今日、生体の力を利用する革新的な治療法の開拓は、今後ますます重要になっていくと思っています。

■分子が作れる！卒業研究で感じた驚きが原点

—そもそも、生体材料の研究に興味を持ったきっかけは？

きっかけは大学4年次の卒業研究です。私は理工学部の学生でしたが、とある縁でMPCポリマーのプロジェクトに携わる機会を得ました。そこでは、有機化学的手法による化合物の合成から細胞等を用いた生化学的な解析に至るまで、循環器系医療機器の抗血栓化を目的とした研究が系統的に行われていました。当時、座学で得た知識が、どう人のために役立つのかと疑問に思っていた私にとってそれは衝撃でした。20年以上にわたって生体材料に関わる研究を続けていますが、研究を始めた頃のワクワク感は今も鮮明に覚えています。

—岩崎先生は、関大メディカルポリマー(KUMP)^{※1}を基軸とする「KU-SMART PROJECT」^{※2}のメンバーでもありますが、現在の研究環境についてはどうお感じですか？

関西大学ではポリマーおよび生体材料に関する研究を行っている教員が大勢います。そのため、これらの研究を進めるために欠かせない設備も最先端のものが揃っています。教員同士の横のつながりも強く、また、学外の医師などとの連携も活発で、非常に良い環境で研究活動を行っています。

また、2019年度入試から、化学生命工学部のAO入試において、「関大メディカルポリマー型」の募集枠が新設されます。化学をベースとして、医療や生命工学に携わりたい、研究をしたい、将来、そういう分野で活躍をしたいという人に、ぜひここで学んでもらいたいですね。



※1 KUMP……関大メディカルポリマー：本学が開発した医療用的高分子材料。温度などを感じ・認識して形を変えたり、溶液からゲルに変化したり、体内で狙った速度で分解吸収されたりと、治療と診断における患者の肉体的・精神的・経済的負担を軽減することが可能な革新的素材。

※2 KU-SMART PROJECT……Kansai University Smart Materials for Advanced and Reliable Therapeutics projectの略称。KUMPを基軸とし、3つのM(Materials, Mechanics, Medicine)で「人に届く」医療器材および治療・診断システムを開発し、社会への貢献を目指し、化学生命工学部、システム理工学部と大阪医科大学が連携して展開するプロジェクト。

Topics ■トピックス [学内情報]

◎「豊かで持続的な集住環境への再編に向けた技術の普及啓発」が評価

江川直樹教授が文部科学省大臣表彰を受賞

平成 30 年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰 表彰式



環境都市工学部の江川直樹教授が、平成30年度科学技術分野の文部科学大臣表彰【科学技術賞(理解増進部門)】を受賞し、4月17日、文部科学省において表彰式が行われた。

文部科学省では、日本の科学技術水準の向上に寄与することを目的とする科学技術分野の文部科学大臣表彰を定めており、科学技術賞は顕著な功績をあげた者に対し、表彰を行うものである。

今般の科学技術賞受賞者は95件191人で、そのうち私立大学関係者はわずか8人。江川教授は、場所性にこだわる集住環境の設計手法に加え、団地の建替・震災復興・地域再生とまちづくり的再生技術を提唱し、設計作品を通して豊かで持続的な集住環境形成技術の普及活動に取り組んだ業績が評価され、今回の受賞となった。こうした取り組みは、設計実践、著作、教育、地域連携など、多くの領域で高い評価を受け、特に地域における空き家の減少、世帯主年齢の低下等に画期的な効果をもたらし、社会に新たな再編技術の実例を提示したこととなる。

●江川直樹教授

江川教授が研究室の学生達と始めた地域連携協働活動としては、兵庫県丹波市の「佐治スタジオ」や京都府八幡市男山団地の「だんだんテラス」、大阪府河内長野市南花台の「コノミヤテラス」など、365日オープンの拠点形成型の地域再生プロジェクトが注目を浴びている。地域住民との情報交換・発信の場として、現地に設置した活動拠点には学生が常駐。自治体や地域住民と協働し、課題の解決やコミュニティーの活性化を図るなど、各地域のまちづくりに貢献している。

近年、「再生」から「再編」への視点は社会に共有され、空間・コミュニティー・制度改編を総合化する集住環境デザインの再編手法への関心も高まっている。「建築」や「建築と建築の間の空間」が「団地再編」「居住再生」に対してどう寄与できるのか。今後に大きな期待が寄せられる。

近年、「再生」から「再編」への視点は社会に共有され、空間・コミュニティー・制度改編を総合化する集住環境デザインの再編手法への関心も高まっている。「建築」や「建築と建築の間の空間」が「団地再編」「居住再生」に対してどう寄与できるのか。今後に大きな期待が寄せられる。

文部科学大臣表彰受賞記念講演 文部科学大臣表彰 科学技術賞 理解増進部門「豊かで持続的な集住環境への再編に向けた技術の普及啓発」
「大学連携地域再編プロジェクトの数々」
「場所の声を聞く」集まって住むカタチのデザイン



日時：2018年7月14日(土)13:00~
会場：関西大学 梅田キャンパス 8階 KANDAI Me RISE ホール
第1部：13:00~14:30「大学連携地域再編プロジェクトの数々」
講演者：関西大学学生生活アドバイザー 一般社団法人カンズ
第2部：14:30~15:30「場所の声を聞く」集まって住むカタチのデザイン
講演者/受賞者：江川直樹教授(環境都市工学部)
会場：関西大学梅田キャンパス 8階 Me RISE ホール
※お申し込みは14日(土)12時前までです。
※お申し込みは14日(土)12時前までです。
※お申し込みは14日(土)12時前までです。
※お申し込みは14日(土)12時前までです。

▲受賞記念講演会とパネル展を開催(於：梅田キャンパス)



空き家を改修して拠点づくり(丹波佐治2007~)

TAMBA-SAJI



空き店舗を改修した住民拠点と住戸改修(男山2013~)

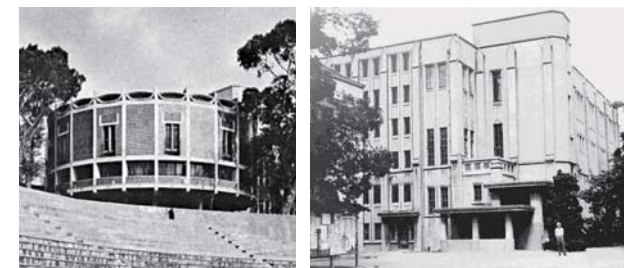
NANKADAI



廊下にもみ出したコノミヤテラス(南花台2015~)

◎簡文館が大阪府指定有形文化財に指定

「戦後の建築」「大学の建築」「村野藤吾の建築作品」として初指定



▲(左)創建時の円形図書館(昭和30年頃) (右)創建時の旧図書館(昭和3年頃)

関西大学千里山キャンパスにある「簡文館」が、大阪の近代期における高等教育機関の施設として価値を有していると評価され、大阪府指定有形文化財に指定された。

簡文館は、1928年に建築された「旧図書館」と、1955年に増築された「円形図書館」により構成され、今年で創建90周年を迎える。「旧図書館」は、関大初の鉄筋コンクリート造で、千里山キャンパス創設時を代表する建物。大阪府内における近代の高等教育機関施設として現存する最古のものとされる。一方、「円形図書



現在の円形図書館外観▶

館」は、戦前から戦後にかけて大阪を拠点に活躍した日本近代の代表的建築家の一人、村野藤吾による建築。村野は、千里山キャンパスで約40棟もの校舎の設計を手掛けており、簡文館は大阪府内に現存する村野の代表作の一つでもある。

今回の指定は、「戦後の建築」「大学の建築」「村野藤吾の建築作品」として、いずれの分野においても大阪府初の指定。これを記念し、2018年度年史資料展示室企画展「簡文館の90年~大学昇格から現在まで~」が2019年3月23日まで、簡文館・年史資料展示室で開催されている。

▲2018年度年史資料展示室企画展「簡文館の90年~大学昇格から現在まで~」

◎紀伊國屋書店・丸善雄松堂とのコラボレーション

電子ブック Trial Reading 「enjoy ebook everyday」を開始



関西大学は「図書館に来なくても学生が利用できる図書館サービス」として、大手書店の紀伊國屋書店、丸善雄松堂とタッグを組み、約4万タイトルの書籍を電子ブックとして提供する取り組み「enjoy ebook everyday~いつでもどこでも電子ブック~」を開始した。

当サービスは、4月から9月までの期間限定だが、半年もの長期間で、同業2社のコンテンツを同時に導入するという例は日本



本取組を記念して作成された紀伊國屋書店とのコラボレーションブックカバー(紀伊國屋書店のブックカバーをベースに関西大学のスクールカラー「紫紺」で関西大学図書館のデザインをあしらった特別仕様)



初。学生は、教養書や学術書、実用書などの電子書籍をスマートフォンやパソコンで自由に無料閲覧できる。

図書館に所蔵されていない本や貸し出し中で読めない本でも簡単に手に入るとして好評を博している。

■社会貢献・連携事業

◎社会安全学部がラジオ放送をスタート

ラジオ番組で防災・減災のノウハウを社会へ発信！



関西大学社会安全学部は、社会の防災力向上を目指し、ラジオ放送「あんぜん・あんしん・アンサンブル」を企画。28の研究室が総力をあげ、4月より毎週、ラジオ大阪「たつをの1dayグッデイ」の番組内、約10分のコーナーにおいて、防災・減災に関するノウハウを発信している。放送は2019年3月までの1年間、全52回を予定。法学、経済学、心理学、工学、情報学と、多彩なフィールドを学問領域とする社会安全学部が、それぞれの分野の視点から、ゼミ単位でアイデアやヒントを紹介している。

当企画は、災害情報学を専門とする近藤誠司准教授のゼミが、3年前からラジオ大阪の「ちょこっと防災」というコーナーを担当してきたことがきっかけで実現。近藤准教授は「最近ではスマホアプリでラジオを聴く若者が増え、ラジオは再び注目されている。災害時だけ頼るのではなく、平素から身近でなじめるメディアに



なるよう、学生と知恵を絞りたい」と語る。まもなく10周年を迎える社会安全学部。これまでに蓄積してきた研究成果を、年間を通し大学の学部単位で、学生が防災ノウハウのプレゼンターとしてラジオ番組に出演し発信するという試みは、全国的にも例をみない企画として期待されている。

ON AIR 【放送枠】…ラジオ大阪「たつをの1dayグッデイ」(毎週土曜日 AM10:00~10:30) 番組内コーナー「あんぜん・あんしん・アンサンブル」
【パーソナリティ】…たつをを氏(タレント/ミュージシャン/防災士/看護師) [参加ゼミ]…関西大学社会安全学部のゼミ

◎国際シンポジウム「山本竟山の書と学問」を開催

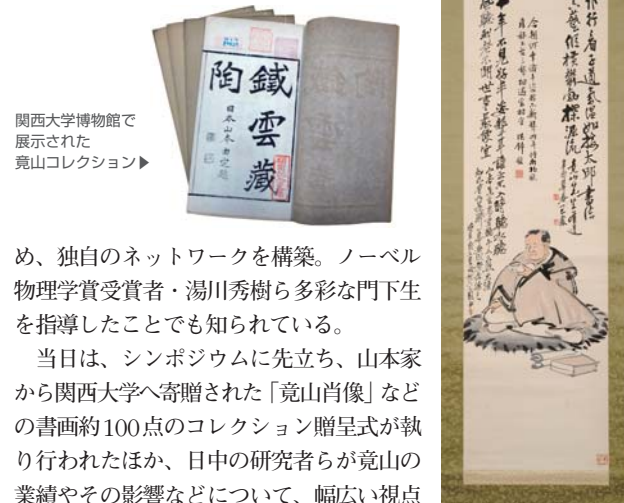
竟山と関西圏の文人との交流を巡る



▲シンポジウムで挨拶をする芝井敬司学長

4月28日、梅田キャンパス「KANDAI Me RISE」にて、国際シンポジウム「山本竟山の書と学問～湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク～」が開催され、研究者や書家ら約200人が参加した。

山本竟山は、明治から昭和初期にかけて関西で活躍した書家で、明治中期から度々中国へ渡り、著名な書家や画家と交流を重ねた。国内では京都を中心に活動する傍ら、東洋史学者・内藤湖南、書家・長尾雨山、文人画家・富岡鉄斎に加え、関西大学のルーツである大阪の漢学塾「泊園書院」の2代院主・藤澤南岳とも親交を深



関西大学博物館で展示された 竟山コレクション▶

め、独自のネットワークを構築。ノーベル物理学賞受賞者・湯川秀樹ら多彩な門下生を指導したことで知られている。

当日は、シンポジウムに先立ち、山本家から関西大学へ寄贈された「竟山肖像」などの書画約100点のコレクション贈呈式が執り行われたほか、日中の研究者らが竟山の業績やその影響などについて、幅広い視点から意見を交わした。

また、これに合わせて関西大学博物館では、5月20日まで2018年度春季企画展を開催し、竟山ならびに、湖南・雨山・鉄斎・南岳の足跡を紹介。今回、山本家から寄贈された竟山コレクションをはじめ、湯川秀樹の書など、竟山にまつわる貴重な品々を展示した。

▲王震・吳昌碩合作「山本竟山肖像」

◎カイザーズクラブ特別講演企画

植松努氏講演会「思うは招く」 & モデルロケット教室を開催



▲ロケット発射の様子(無人航空機(UAV)で撮影)



講演を行う植松努氏

5月26日、カイザーズクラブ特別講演企画として、植松努氏講演会「思うは招く」&モデルロケット教室が、千里山キャンパスにて開催された。

植松氏は、北海道の産業機器メーカーの社長として独自にロケット開発に挑戦し、小型人工衛星開発やアメリカ民間宇宙開発企業との共同事業等にまい進している。講演会では、「どうせ無理」は人間の自信と可能性を奪う恐ろしい言葉であり、夢は「だったらこうしてみたら?」という考えでかなうのだと、可能性を広げることの大切さについて熱く語った。



▲ペーパークラフトロケットを製作する小学生達

無人航空機(UAV)を用いて、ロケット発射の様子を上空から撮影。

当日は、一般申し込みの親子500人と関大生250人が参加。固唾を飲んでロケットの発射を見守り、大盛況のうちに終了した。

◎〈関西大学簡文館 大阪府指定有形文化財指定記念〉2018年度 関西大学博物館ミュージアム講座

大阪の近現代建築とその楽しみ方を知る



千里山キャンパスは、1950年頃から30年に渡り、村野藤吾が約40棟の建物を設計し、現在のキャンパスの骨格を形成してきた。なかでも、1955年に村野が円形部分を増築した「簡文館」は、2007年に国の登録有形文化財として登録され、大阪府内に現存する村野の代表作として知られる。

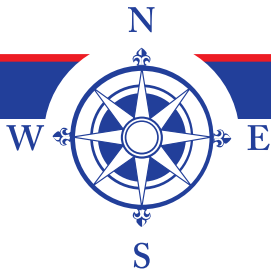
このたび、簡文館が大阪府の指定有形文化財にも指定され、それを記念する全3回の講座「2018年度 関西大学博物館ミュージアム講座～大阪の近現代建築とその楽しみ方～」が開催された。これは、赤レンガ建築からレトロモダンな戦後建築まで、大阪にある個性豊かな建築の価値や保存活用の取り組み、建物や街の楽しみ方について専門家が講義するという内容。講座後には建築ガイドツアーも実施された。



▲第4学舎2号館。建物と地面との空間に重量感を軽く見せる工夫がされている
◀ 関西大学会館のバルコニーで解説する橋寺知子准教授

第1回目の4月28日は「関西大学の村野建築」をテーマに、千里山キャンパスにて開講。ツアーでは、第4学舎(理工系学舎)など、大地と建築が調和した村野の配置計画等を実際に見て歩いた。続く、第2回目の5月12日のテーマは「大阪府内の近代建築と文化財」。ツアーでは、普段公開されていない関西大学会館に赴き、村野建築ならではの曲線を描くらせん階段と屋上から見た千里丘陵の眺望を堪能した。そして、第3回目の5月19日は「近現代建築の楽しみ方ーイケフェス大阪ー」をテーマに梅田キャンパスにて開講。延べ312人の参加者は、専門家の話に熱心に耳を傾け、ツアーを楽しんだ。

関西大学会館のらせん階段▶



環境都市工学部土木系学科創設50周年・都市システム工学科創設10周年記念式典を開催



4月28日、千里山キャンパスにおいて、「環境都市工学部土木系学科創設50周年・都市システム工学科創設10周年記念式典」が挙行された。

土木系学科は1967年に工学部に創設。これまでに5,000人以上の人材を輩出し、多くの卒業生が教育機関や官公庁、民間企業等で活躍している。一方、都市システム工学科は2007年の理工系学部改編により、当時の都市環境工学科とシステムマネジメント工学科の一部を統合。環境都市工学部の一学科として、IT化の流れ等をいち早くとらえた教育・研究を展開してきた。



式典では、芝井敬司学長、池内啓三理事長、環境都市工学部部長の山本秀樹教授らから祝辞が述べられた。また、OBでパナソニック株式会社前代表取締役の大坪文雄客員教授と、堂垣正博名誉教授による記念講演も行われ、約300人の参加者が話に聞き入った。

今春から下宿を始める学生に向けて「新入生歓迎の集い」を開催

4月4日、千里山キャンパスにおいて、新生活のスタート及び、学生同士の交流をサポートするイベント「関西大学 新入生歓迎の集い2018」が開催された。このイベントは、今春から一人暮らしを始める新入生が対象。同じ境遇の仲間同士で悩みや不安を共有・解消できるよう、大学、教育後援会、校友会が、関西大学生協の協力を得てオール関大の枠組みとして実現に至った。



会場のたこ焼きがきっかけで結成された「チームたこ焼き」

当日は、約900人もが学生が集結。応援団による演舞の後、体育会アイススケート部の宮原知子さん(文3)から「関大でぜひ興味のあることを見つけてください」とエールが送られたほか、懇談では、たこ焼きやお好み焼きなど、大阪の食文化を堪能する立食パーティーも開催。高増明副学長、岡本哲和学生センター所長、経済学部の中澤信彦教授やOGのシンガーソングライター・花房真優さんらによる歓迎ライブも行われ、会場は大いに盛り上がった。



▲高増明副学長らによる歓迎ライブ

ICUチアリーディング世界選手権大会、The Dance Worlds2018において平俊哉さんが連続優勝



4月25～27日、アメリカ・フロリダ州で開催された「ICUチアリーディング世界選手権大会2018」のTeam Cheer Hip Hop部門において、平俊哉さん(人1)がTeam JAPANとして出場し優勝。続く4月28日、同じくフロリダ州で開催された「The Dance Worlds2018」のOpen Coed Hip Hop部門においても優勝を飾った。

◀「Team JAPAN」のメンバー

体育会器械体操部の木村僚太さんが第60回関西学生体操選手権大会で優勝！男子団体も2位と健闘

4月22日、奈良県立橿原公苑第1体育館にて行われた第60回関西学生体操選手権大会において、体育会器械体操部の木村僚太さん(商3)が男子種目別選手権の部・鉄棒で1位となった。さらに男子個人総合選手権の部でも5位に入賞した。また、男子団体総合選手権の部では、本学が2位入賞という好成績を取めた。



千里山東体育館がリニューアル竣工



建て替え工事を進めてきた千里山東体育館が完成し、3月12日、竣工式が挙行された。新体育館は、地下1階、地上3階、延床面積6,895.53㎡。従来の体育施設としての機能に加え、約1,300冊のスポーツ専門図書を取りそろえるSports Libraryや災害用備蓄倉庫を設置。備蓄倉庫は壁面を一部ガラス張りにすることで、設備や物資を「見える化」し、防災意識の向上を図る。また、災害時の電力供給機能として、「ガスコージェネレーション」も導入されるなど、今後も多様な活用を創出していく。